

米当局が認めた「コロナワクチン」の間



宮城県に住む須田陸子さん(34)の夫、正太郎さん(36)が亡くなったのは2021年10月7日。ファイザー社製ワクチンの2回目接種を終えた3日後のことだった。

- ▶ FDAが慌てる接種後 増加「命に関わる」病とは
- ▶ 「mRNAワクチンは短期間で分解」の大ウソ
- ▶ 専門家が警鐘「弱毒化ウイルスよりワクチンの方が危険」
- ▶ 遺族の慟哭「厚労省は亡くなった人と向き合っていない」

特集

遺族の声は「聞く力」の持ち主に届くのか

まだ幼い子供をのこして……(須田さん夫婦と3人の子供)

「と声をかけ、そのまま就寝しました」

当時、須田さん夫婦には3人の子供がいた。9歳の長男、3歳の次男、2歳の長女。そして、須田さんのお腹の中には間もなく生まれる次女がいた。

「翌日、夫は熱が39度台まで上がったので仕事は休むことに。私は仕事に出かけてしまいました。夫は一日中食欲がなかったようです。私が帰ってきた時はかなり具合が悪そう。胸の圧迫感を訴え、すごく息苦しいと肩を息をするほどでした。そこで私が病院に連絡すると、副反応だと思えます。痛み止めを飲んで様子を見て下さい」と言われたのでロキソニンを服用しました(同)

翌朝、まだ39度近く熱があったが、夕方には下がったので2日ぶりにシャワーを浴び、家族そろって夕飯を食べることができた。寝る前、「治ったみたいだから明日は仕事行くわ」と須田さんに伝えた正太郎さんは長男、次男と共に2階の部屋で就寝。須田さんは夜泣

きが続いてきた長女と1階の和室で寝た。

「次の日の朝、いつも起きてくる時間に起きてこない。男に起こしてやるよう頼むと、布団の中で亡くなったの。急いで救急車で病院に搬送してもらいましたが手遅れでした……」

「夫には基礎疾患はなく、大きな病気をしたこともありませんでした。むしろ筋トレをしていて、人より健康に気を遣っていたと思います。病院には私と夫の両親が付き添って行きました。その時から、ワクチンのせいじゃないかと考えていました」

死体検案書に書かれた直接的な死因は「急性循環不全」。医師には「ワクチン

本誌が2週にわたって報じてきたコロナワクチンの「不都合なデータ」。相次ぐ接種後死亡例、激増する超過死亡、死に至る副反応——政府・厚労省が目を開けるワクチンの「負の側面」の一部を、ワクチンを緊急承認したアメリカの食品医薬品局(FDA)が認めた。

が原因ではないか」と伝えだが「今の技術ではそうと特定できないので」と一蹴された。

「その後も、ワクチン接種後にこうなったのだから、ワクチンが原因と書いて欲しい」と病院側に伝えて何度かやり取りをしました。その結果として、ここまですが限界です、ということでも副反応の可能性を否定できない」との一文は国への報告書に書き加えてもらいました(同)

正太郎さんのケースと同じく、医療機関やワクチン製造販売業者から国に報告された、国内でのワクチン接種後の死亡例は22年11月13日までで1919件。ただ、厚労省がワクチン接種と死亡の因果関係を認めた例は1件もなく、正太郎さんのケースも「(評価不

能」とされている。「夫は次女が生まれるのをすごく楽しみにしていました。そして、妊娠中の私や子供たちを守るため、厚労省が『安心・安全』だとアピールしていたワクチンを打って死んだのです」と、須田さんは語る。「それにもかかわらず、因果関係について、評価不

「かなり不都合な結果」

本誌が2週にわたってお伝えしてきた、コロナワクチンの「光と影」。

先ごろ、厚労省は新型コロナウイルスのオミクロン株が流行した22年7月～8月の致死率を公表した。それによると、80歳以上の致死率は1・69%で、季節性インフルエンザの1・73%より低くなった。60～70歳代ではコロナが0・18%に對して、インフルは0・19%。60歳未満ではコロナが0・00%、インフルが0・01%の結果である。

この中でも特に、高齢者の致死率が下がった背景に「ワクチン効果」があるこ

能」とは、どういうことなのか。亡くなった人に正面から向き合っていないと思えます。厚労省は、ワクチン接種が原因で多くの方が亡くなったという事実はない」と説明していますが、あと何人死ねば認識を改めるのか。どれくらい死者が出たらワクチンの接種を中止するのでしょうか

とは間違いなからう。しかしそうした福音の一方、ここにきてワクチンに関する決して看過できない、不都合なデータが次々と明らかになっていく。須田さんの夫のようにワクチン接種後に死亡するケースが2000件近く報告されていることはその一つだ。にもかかわらず政府は目下、国民全般への追加接種に加え、5～11歳の小児、生後6カ月～4歳の乳幼児にまでワクチン接種を推奨しているのだ。

これまでも繰り返し述べてきた通り、ワクチンを打つか打たないかは個々の判

断。しかし、我々を取り巻く状況は、ワクチン接種が始まった21年とは全く異なっている。我々の前には、知っておくべき「事実」や「データ」がいくつも存在している。

例えば、「例年より増えた死亡者数」を表す超過死亡23頁のグラフを見れば分かる通り、22年1月～3月、ワクチンの3回目接種率と同じペースで超過死亡が増えている。しかもこれは我が国特有の現象ではなく、韓国やEUなど多くの国が同じ事態に直面。「死亡者が著しく増えているのはワクチンの追加接種が原因ではないか」との声が上がっているのだ。

また、我が国のように追加接種を積極的に進めている国や地域ほど新規感染者数が多くなっている。つまり、追加接種を進めるほど感染が広がり、接種率と同じペースで超過死亡も増える。数々のデータは、そんな「不都合な事態」を物語っているのだ。さらに、である。ここへきて、コロナワク

チンを「緊急承認」した当のアメリカ食品医薬品局（FDA）にも動きがあった。去る12月1日、国際学術雑誌「ワクチン」に掲載されたのは、FDAが実施した『65歳以上の高齢者を対象としたCOVID-19ワクチンの安全性に関する調査』についての報告。それによると、65歳以上のアメ



リカ人1740万人を対象にした調査で、ファイザー社製のワクチンを接種する前と後で、肺塞栓症という病気になる頻度が統計的にみて有意に高くなっていたのだ。すなわち、FDAがワクチンの「影」の部分で初めて認めた、ということになる。「FDAがこういったこと

を公表した意味は大きいと思います。ワクチンを承認した機関が自らそう言っているわけですからね」そう話すのは、京都大学名誉教授の福島雅典氏。京大医学部教授や京大附属病院外来化学療法部長などを歴任したがんの専門医だ。「報告には、肺塞栓症の他、急性心筋梗塞、播種性血管内凝固症候群、免疫性血小板減少症になる頻度が高くなったと書かれています。その後さらに検証を細かくやって数字をいじったところ、肺塞栓症だけが有意差があった、としています。他の三つについても頻度が高まるという結果が最初に出ていることに違いはありません」

「このように命に関わる病になる頻度が高まっているというのは、FDAにとってもかなり不都合な結果です。そのため慌てて『ワクチンの潜在的なベネフィット（利益）がCOVID-19感染の潜在的リスクを上回ると強く確信している』と書き加えたのでしよう。本来、『確信している』なんて科学の世界ではナンセンス。実際、この1行に関する根拠は示されていません」しかも、今回の調査は65歳以上の人のみ。「その年代だと『ベネフィットが上回る』公算も多少あるのかもしれないが、下の世代を調べたらどうも言えず、もっと大事になる可能性もあります」（同）

全身にmRNAが...

いづれにせよ、ワクチン接種開始後、命に関わる病になる頻度が高まっている

「その年代だと『ベネフィットが上回る』公算も多少あるのかもしれないが、下の世代を調べたらどうも言えず、もっと大事になる可能性もあります」（同）

「本来、体内にRNAを取り入れても、RNA分解酵素によってすぐに分解される体内に長く漂っているのはよくないのです。しかしコロナワクチンでは、効果を一定期間持たせるため、mRNAを色々と修飾しています。また、脂質ナノ粒子の膜の中に入れておくことで、細胞に効率よく取り込まれるようにしています。要するに、膜の中にmRNAが含まれた、擬似ウイルスのよ

うな構造になっているわけですが、ナノ粒子は体中の細胞に取り込まれることが可能で、「抗体を生産してほしい目的とする免疫細胞だけではなく、他の細胞にも取り込まれることは問題です。ナノ粒子は血管内皮細胞をはじめ、様々な細胞に取り込まれます。取り込んだ細胞からはスパイクたんぱくが生産され、それが血液中に放たれると、目的通り抗体は作られます」ただし、「mRNAをナノ粒子として安定させ、体中の細胞に取り込ませるといことが、様々なリスクを生みます。スパイクたんぱくができることで、その細胞では炎症

が起きます。血管内皮で炎症が起これば血栓ができて、血管は体中、臓器すべてに行き渡っていますから、何が起これば不思議ではない」厚生省のHPには、ワクチンで注射するmRNAは短期間で分解されていきます。との見解が載っている。「短期間で分解されることにはあり得ないでしょう」と、長年小児がんの研究、治療に携わってきた名古屋大学名誉教授の小島勢二氏。「ある程度体内に残り、全身にmRNAが回るといことはデータではつきりと証明されています。リンパ節や肝臓、副腎にも行く。短期間で分解という見解は見直しが必要です」

「薬としてのコロナワクチンはもちろんアウト。血栓形成や炎症といった副作用が強く、長期的に見ても免疫抑制が起る可能性がある。免疫が抑制されれば当然、発がんリスクは高まっています」そう指摘した上で佐野氏は断言する。「政府が言うように何カ月かおきにワクチンを打つ、といったことを続けていたらとんでもないことになりかねません。コロナワクチンは打てば打つほど危険性は上がっていくと思います。その危険性は若い人でもお年寄りでも変わりません。今ではコロナウイルスは弱毒化していますので、ワクチンを打つことのほうが逆に危険だと思えます」

大本営発表

高知大学医学部皮膚科学講座名誉・特任教授の佐野栄紀氏も、「コロナワクチンのmRNAは分解されないように改良してあり、全身この細胞に取り込まれてもスパイクたんぱくを作ることがで

きます。つまり、どの臓器に障害が現れてもおかしくないという事です」と、こう語る。

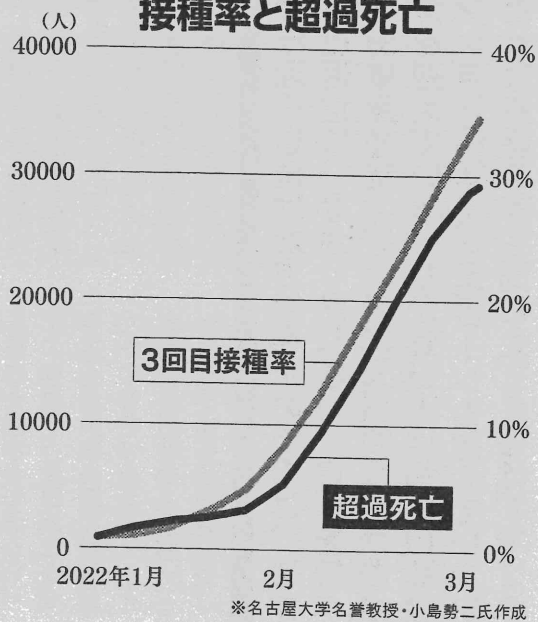
「ワクチン接種後、皮膚などに症状が出た人の患部の組織を取って染色すると、ワクチン由来のスパイクた

「ワクチン接種後、皮膚などに症状が出た人の患部の組織を取って染色すると、ワクチン由来のスパイクた

「ワクチン接種後、皮膚などに症状が出た人の患部の組織を取って染色すると、ワクチン由来のスパイクた

「ワクチン接種後、皮膚などに症状が出た人の患部の組織を取って染色すると、ワクチン由来のスパイクた

日本における3回目ワクチン接種率と超過死亡



「夫より先にワクチンを接種した私は接種前、ネットの色々と調べてはいました。が、『安心・安全』という趣旨の情報しか見つけることができませんでした。当時、ワクチンに関するリスク情報を得るのは相当難しかったです」と

割が否定的な意見や誹謗中傷でした。中には、『流産しろ』『子供も嘔吐に育つだろうな』といったひどいものもありました」

「このように命に関わる病になる頻度が高まっているというのは、FDAにとってもかなり不都合な結果です。そのため慌てて『ワクチンの潜在的なベネフィット（利益）がCOVID-19感染の潜在的リスクを上回ると強く確信している』と書き加えたのでしよう。本来、『確信している』なんて科学の世界ではナンセンス。実際、この1行に関する根拠は示されていません」

「このように命に関わる病になる頻度が高まっているというのは、FDAにとってもかなり不都合な結果です。そのため慌てて『ワクチンの潜在的なベネフィット（利益）がCOVID-19感染の潜在的リスクを上回ると強く確信している』と書き加えたのでしよう。本来、『確信している』なんて科学の世界ではナンセンス。実際、この1行に関する根拠は示されていません」

「このように命に関わる病になる頻度が高まっているというのは、FDAにとってもかなり不都合な結果です。そのため慌てて『ワクチンの潜在的なベネフィット（利益）がCOVID-19感染の潜在的リスクを上回ると強く確信している』と書き加えたのでしよう。本来、『確信している』なんて科学の世界ではナンセンス。実際、この1行に関する根拠は示されていません」

「このように命に関わる病になる頻度が高まっているというのは、FDAにとってもかなり不都合な結果です。そのため慌てて『ワクチンの潜在的なベネフィット（利益）がCOVID-19感染の潜在的リスクを上回ると強く確信している』と書き加えたのでしよう。本来、『確信している』なんて科学の世界ではナンセンス。実際、この1行に関する根拠は示されていません」